

金融市場動向（平成3年9月）

1. 準備預金制度の準備率引下げ

日本銀行は、10月1日、準備預金制度の準備率を引下げ、10月16日に実施することを決定した。今回の措置は、準備預金負担についてこれをある程度軽減することによって、金融調節を一層円滑に運営し得るような環境整備を図る観点から実施したものである。

2. 短期金融市場

9月中のオーバーナイト・レート（無担コール）は、上旬に大幅低下をみた後、中旬以降は概ね7.0%前後で小動きに推移した。また、ターム物（手形3か月物）も、概ね一貫して低下し、月中では約0.9%の低下となった。この間、ユーロ円金利先物（金利ベース）は低下した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は34兆8,021億円と前月（35兆2,191億円）を下回った。

短期金融市場金利



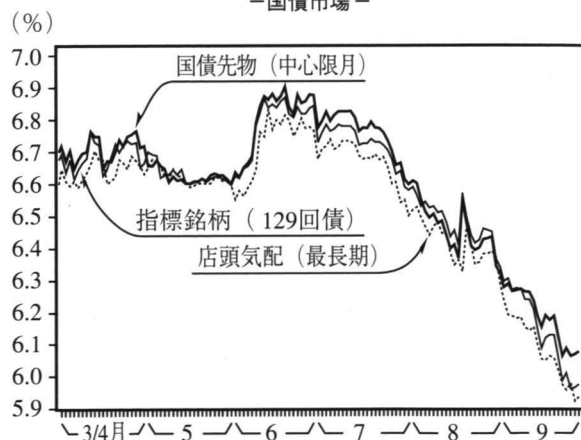
3. 資本市場

9月の国債利回り（129回債）は、国内短期金利の低下や為替円高等を背景に月中を通じて低下した（9月末5.98%＜前月末6.34%＞、国債先物中心限月6.09%＜同6.32%＞）。

国債の出来高（1営業日平均）をみると、現物（店頭取引）、先物とも前月を下回った。

株式市況（日経平均株価）は、国内長短金利の低下や為替円高等を受け、中旬以降堅調に推移し、23,916円（前月末比+1,581円）で

既発債市場利回り
—国債市場—



越月。株式出来高（東証第1部月中1営業日平均）は4.8億株と、低水準であった前月（2.3億株）を大きく上回った。

起債動向をみると、9月の短期国債は、証券会社中心に玉確保の動きがみられたため前向きな応札となった（9月5日入札分<6か月物>、募入平均利回り6.654%、応募倍率2.50倍、9月13日入札分<同>、同6.255%、同2.38倍）。

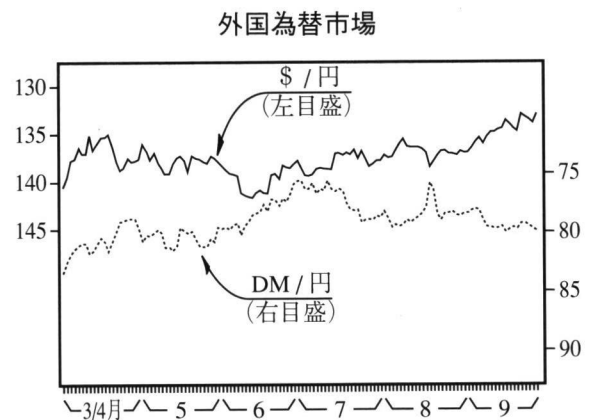
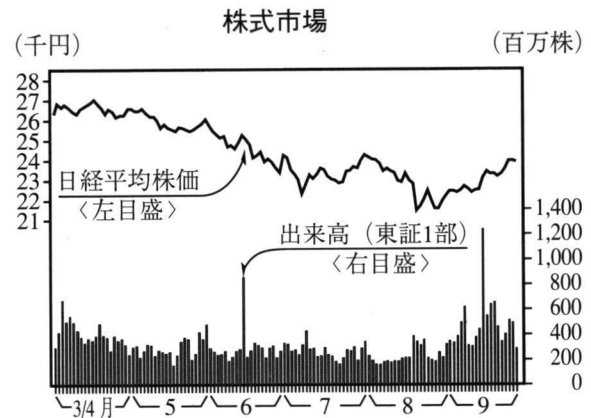
エクイティ市場での発行（9月払込み分、国内市場発行分）については、前月高水準のあと前月比減少した。

国内公募事業債の発行は、クーポンレートの低下もあって、低水準であった前月を大きく上回った（8月200億円→9月1,387億円）。

4. 外国為替市場

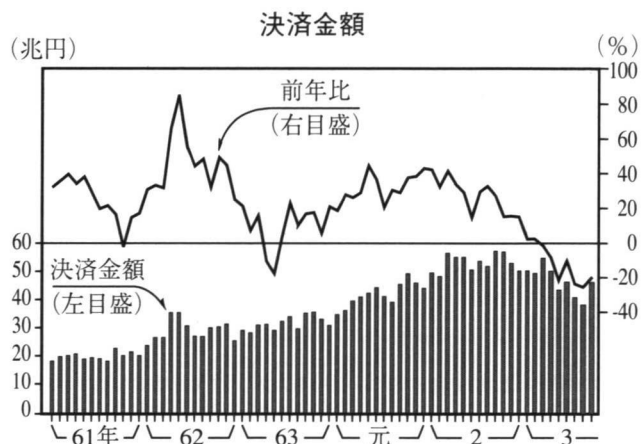
9月の円相場（対米ドル直物相場、終値）は、米国の緩慢な景気回復を背景とする金融緩和期待から、月央にかけて堅調に推移した後、13日の米国公定歩合の引下げ（5.5%→5.0%）にもかかわらず、金利先安感が払しょくされなかったため、月末にかけてさらに上昇、結局132.95円で越月した（前月末136.88円）。また、マルクの対円相場（ニューヨーク市場、終値）は、ソ連情勢の小康や日独金利差の拡大から月中を通じて底堅く推移し、79.87円で越月した（前月末78.33円）。

この間、外国為替市場出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は175.2億ドルと、低水準であった前月（133.3億ドル）を上回った。



5. 決済

9月の資金決済の金額（1営業日平均）は、前年に比べて減少した（手形交換高＜東京＞前年比△20.9%、全銀システム取扱高同△3.7%、外為円決済交換高同△22.5%、日本銀行当座預金受払額同△8.8%）。また、国債の決済金額（1営業日平均、移転登録および振込口座振替）は、移転登録（前年比△14.7%）、振込口座振替（同△0.3%）ともに前年比減少した。



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

6. 資金需給、金融調節

9月の資金需給は、財政要因が租税、厚生・労働保険料の受入れ等から1兆8,900億円の不足（前年同4,913億円）となったほか、銀行券要因も2,038億円の不足（前年同2,609億円）となったことから、全体でも1兆5,325億円の不足（前年同5,895億円）となった。

これに対し日本銀行は、FBの買戻しおよび債券の短期買入れ等により資金を供給した。

10月の資金需給（国債発行織込み前）については、銀行券要因が3,000億円程度の余剰となる見通し（前年同6,091億円）であるほか、財政要因についても、厚生・国民年金の定時払いが見込まれることなどから1兆4,100億円程度の余剰となる見通し（前年同3兆7,159億円）。この結果、全体では1兆8,700億円程度の資金余剰と予想される（前年同4兆5,947億円）。

7. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

8月のM₂+CD平残前年比伸び率は+2.8%と、前月比0.6%ポイント低下した。これは、貸出の伸び率が引続き低下したのに加え、郵便貯金等マネー対象外金融資産へのシフトがみられたことによるもの。通貨種類別にみると、準通貨の伸び率が大口定期預金、小口MMCを中心に引続き低下した一方、預金通貨は伸び率を高めた。

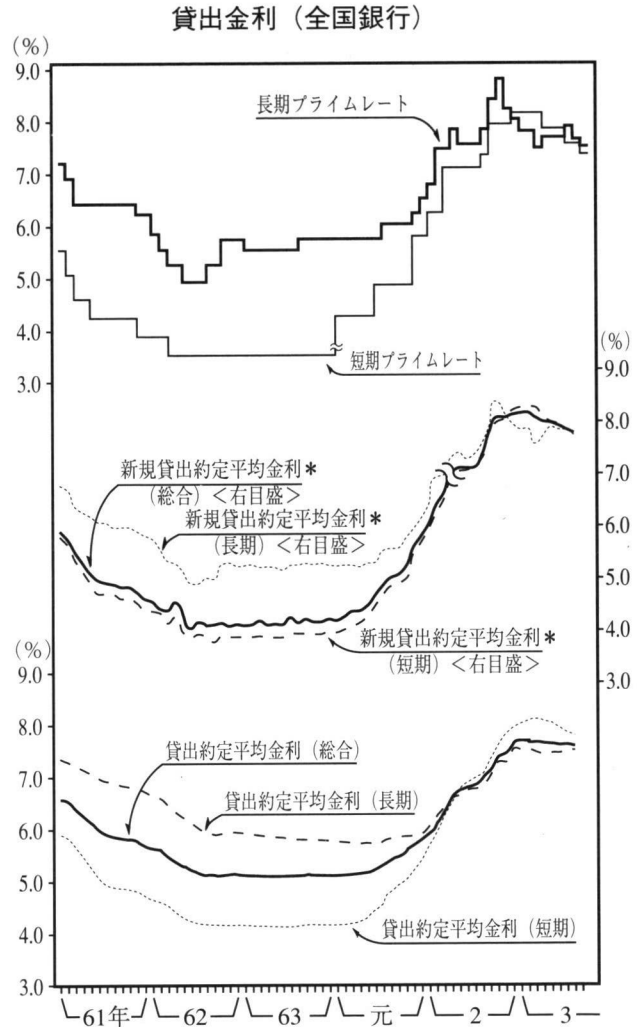
9月の銀行券平残前年比は、+1.2%と引続き低い伸び（前月+1.6%）。

9月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+CD、都銀、地銀、第二地銀協加盟行）は、前年比+1.4%と前月（同+2.6%）をさらに下回り、既往最低の伸びとなった。また、貸出平残（都・長銀、信託、地銀、第二地銀協加盟行）も、前年比+5.2%と既往最低の伸び率となった（前月+5.5%）。

8. 貸出・預金金利

8月中の新規貸出約定平均金利(全国銀行)をみると、短期金利が短期プライムレート引下げ(7月16日以降、7.875%→7.625%)の影響から、また、長期金利は長期プライムレートの引下げ(8月1日、7.9%→7.7%)から、それぞれ前月比低下し(短期△0.062%、長期△0.092%)、長・短総合でも前月比低下した(7月7.843%→8月7.774%)。この結果、貸出約定平均金利(全国銀行)も、短期(△0.065%)、長期(△0.005%)、総合(7月7.613%→8月7.592%)のいずれも前月比低下した。

この間、8月の大口定期預金金利(3か月以上6か月未満の都銀平均受入金利)は、前月比低下した(7月7.391%→8月7.029%)。



(平成3年10月14日、調査統計局)